

山形県 県史だより

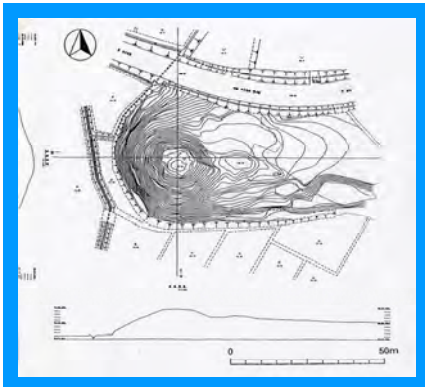
第5号

山形県総務部学事文書課分室 県史資料室

鷺畑山古墳群
発掘調査から



第一次調査後の
現地説明会。



鷺畑山1号墳の実測図。



鷺畑山1号墳の全景。

特別寄稿

日本海側北限の古墳

鷺畑山（さぎはたやま）古墳群

山形県地域史研究協議会副会長

川崎 利夫

日本の古墳分布の北限をなす本県には、戦後の開発によって消滅したものも含め古墳が七〇〇基余りあります。その中には、全長九メートルの前方後円墳稲荷森古墳や二〇〇基余り群集する米沢市戸塚山古墳群や川西町下小松古墳群などがあります。村山地方にも、山辺町大塚天神古墳や山形市菅沢二号墳など直径五メートルを超える大型円墳があり、埴輪を伴う古墳として注目されています。

これらの古墳は、日本における国家形成期の畿内に成立した大和連合政権や地域社会の形成を示す重要な資料です。

二

七二二年に出羽国が設置され、その国府が置かれた庄内地方では、鶴岡市菱津で明治末年に偶然発見された組合式長持型石棺を主体とする菱津古墳が知られていますが、他に古墳の存在は皆無の状態でした。ところが、一九九〇年代に藤島町の東田川文化記念郷土研究サークルによって、町の東側の丘陵地で四基の古墳が発見され、その後の県教育委員会文化課による

分布調査によっても古墳が確認されました。

やがて、その重要性から藤島町教育委員会によって一ノ号墳の測量調査が実施され、二〇〇四・五年に二・四号墳の測量が東北芸術工科大学によって行われます。さらに、佐藤禎宏氏や萬年利浩氏らによる研究発表があり、庄内で現存する唯一の古墳群とされ、古墳研究者らにあらためて注目されることとなりました。

鷺畑山古墳群は鶴岡市添川字西山に所在し、添川集落の南西部に当ります。月山の泥流が形成した台地は、平地部に向かってわずかに傾斜しますが、一ノ号墳は台地縁辺部にあり、その一六〇メートル北側に二・三号墳があり、四号墳はそこより五〇メートル東側に位置します。

二〇一三年春、庄内考古学研究会や郷土研究サークルなど三〇名が集い、鷺畑山古墳群調査会が発足し、すべて民間による発掘が始まります。資金や器材など何もないところから始まり、器材などは主として致道博物館などから借用し、資金は市の補助金や有志による寄附によってようやく発掘調査までこぎつけることができました。ここに至るまでの青山崇事務局長の大変な苦勞や、連日の調査にボランティアで参加された方々に謝意を表します。

三

調査は、二〇一三年九月十四日から発掘が始



墳頂部の表土下の礫石。



鷺畑山1号墳の全景。

まりました。最も縁辺部にある一ノ号墳は、直径二六メートル、高さ三メートルの円墳で、その東側に若干の高まりがみられるところから前方後円墳との疑いもありました。西側は墳丘がそのまま崖になって平地部にのびるので、ここから望む古墳はかなり大きな古墳とみえますが、県内の例からすれば中規模の円墳といえることができます。この墳丘に、東西三〇メートル、南北三六メートルのトレンチ（試掘溝）を設定し、その内部の発掘から始まりました。両トレンチが交差する墳頂部は、表土下の旧地表に大小の礫石が散乱し、中には凝灰岩を方形に加工した石片などもみられ、墓石のように整然としたものではありませんが、これらが散乱する墳丘の西寄りのあたりに埋葬施設があるものと推定されます。また、墳丘縁辺に近い東北部に地表からやや陥没した箇所があり、埋葬主体である木棺が腐朽して落ち込んだ可能性もあると考えられます。そうすれば、先の主体部とともに二か所に埋葬施設があったとも考えられます。さらに、若干高まりをみせる東側の墳麓において、墳丘を囲むように巾二・五メートル、深さ二〇～三〇センチの周溝が地山を掘りこんで発見されたので、これで前方後円墳ではなく円墳であることが明らかになりました。

九月二十一日には現地説明会が開かれ、七〇

名の参加者があり、マスコミ関係者や古代のロマンに思いをいたす人々が集まりました。このようにして、一〇日間にわたる第一次発掘調査が終了しました。

翌二〇一四年には、五月二十九日から約一週間の日程で第二次調査が行われました。この時は、前年に設定したトレンチを基底部より発掘することにより、墳丘部の構築方法を解明することに主眼がおかれました。おそらく、前年に発見された周溝は、墳丘の造成にあたって区画を設定する溝であり、その内部に盛土を行って漸次塚を構築するために設けられた溝であることがわかり、普通の聖なる地を囲む周塚（周隄）ではありません。盛土にあたっては、周辺より土砂を運び漸次積み上げていったものと思われる。土と粘土や砂を交互に積んでならしながら塚をつくり、土砂の流出を防ぐ版築の手法で造られた塚ではないことが、明らかにになりました。土層中にさまざまな土が混ざっていることや、その中に縄文土器や弥生土器片が混入していること、流出を防ぐ為に礫石を並べて部分的にふみ固めていることなども、明らかにになりました。周辺には縄文土器などの散布地が多く、それらの土砂を集めて積み上げていったものと考えられます。

この調査が終ってから、東北芸術工科大学の



調査の様子。



表土を除去した後のトレンチ内。



墳丘中より出土した縄文土器片。

特別寄稿を頂いた後に、今年六月二日から八日まで、鷺畑山古墳群一号墳の第三次発掘調査が行われました。この調査で、土留め石とみられる多数の安山岩や縄文・弥生時代の土器・土師器の破片等が見つかっています。

北野博司氏らによって、この一号墳の北に位置する二号墳の発掘調査が行われました。これは、東西一五・〇メートル、南北一六・三メートル、高さ三・三メートルの方墳ですが、トレンチ下方より、二重口縁壺の塩釜式の土師器小破片が発見されました。これにより、築造年代が四世紀代であることがわかりました。今後の調査が期待されます。なお、鷺畑山一号墳の調査報告書は、一次・二次とも東田川文化記念館で求めることができます。

四

県内に最初に古墳が出現するのは、四世紀代の前方後方墳や方墳であり、方墳が五世紀後半に築かれることはありません。おそらく、鷺畑山古墳群の二丁四号墳は方墳であり、最後に営まれた一号墳はもっとも規模が大きい円墳で、おそらく五世紀前半まで遡るものとみられます。これらは、四世紀から五世紀にかけて赤川の東を支配下に置く代々の首長墓であった可能性が高くなっています。

日本海側北限の古墳である鷺畑山古墳群は、大和連合政権との関連や庄内地域の開発の状況を把握する上できわめて重要な古墳です。今年六月二日から行われる第三次調査により、明確に年代設定が行われ、その様態が一層明らかになることを期待しています。

七〇年前の新聞報道 特攻隊員の死と戦意発揚



昭和19年11月30日付『山形新聞』二面。山形県立図書館所蔵。特攻攻撃戦死者細谷幸吉少尉に関する記事。

第二次世界大戦が終わり七〇年目となる今年、戦争の記憶と記録を風化させない取組みが世界中で叫ばれています。あらゆる生活が軍の統制下に置かれた戦時下の新聞報道も、一つの戦争の姿です。

新聞は昭和十七（一九四二）年から一県一紙となり、山形県では、『山形新聞』が唯一の新聞となります。七〇年前の新聞は、表裏二ページ建てです。昭和十九年十一月三十日付『山形新聞』の一面は、特攻攻撃の成果が大きく紙面を占めています。「戦艦一大巡三層（ほ

ぶ）る 大型輸船等六隻撃沈 破細谷少尉本県出身も参加」「八紘隊出撃 レイテ湾十機十艦に命中」「**「壮絶、敵艦船へ轟（まっしぐら）ら特攻隊引続き戦果拡大中」**の見出しが並び、前日の「大本営発表」が掲載されています。

一、我特別攻撃隊八紘飛行隊は十機を以て十一月二十七日レイテ湾内の敵艦船に対し果敢なる攻撃を敢行し次の如く敵艦船十隻を撃沈破せり

轟撃沈 戦艦一隻、大型巡洋艦三隻、大型輸送船四隻
大破炎上 戦艦又は大型巡洋艦一隻、大型輸送船一隻
我掩護戦闘機三機未だ帰還せず

二、右攻撃に参加せる八紘飛行隊員次の如し
隊長陸軍中尉田中秀志、陸軍少尉細谷幸吉、同藤井信、同森本秀郎、同善家善四郎、同武内健一、同寺田行二、同白石國光、同道場七郎、同馬場駿吉

「神風特別攻撃隊」は、戦争末期に、戦局打開のために日本海軍が編成した航空機による特別攻撃隊です。敵の防空陣を突破して空母等に体当たり攻撃をして打撃を与えるのが目的で、昭和十九年十月にフィリピンで編成され、レイテ湾海戦に投入されました。これ以後、この戦法は他部隊や陸軍にも広がり、国民に「特攻隊」の名が知られるようになりました。
記事にある陸軍の特攻攻撃は、

山形市出身の細谷幸吉少尉が一〇名の八紘飛行隊員に含まれていることから、『山形新聞』がこれが大々的に取り上げたものです。山形県出身者初の特攻隊員の死は、県民に大きな衝撃と感動をもたらしました。同新聞の二面には、「生還なき神鷲 悠久の空へ」「山形出身の細谷幸吉少尉 征途につく言葉 ただ母の身気づかて」「生還期せず 兄への遺言」「不言実行型 同級生談」「母校の第一国民学校」「山商に凱歌 バタアンの原因戦車兵と同級 原田君とは性格が反対」などの見出しで、細谷少尉を讃え紹介する記事が続きます。また、出撃にあたり別れの敬礼を交わす陸軍特攻隊の勇士、山商野球部時代の細谷少尉、在りし日を偲ぶ母と弟、愛機に隊号を書き留める八紘隊員などの写真が並びます。さらに、「我ら恥ぢる点なきや 渡部県経済第二部長談」「特攻隊に続かん 予科練へ血書の嘆願」「倍増の県下工場 我らの細谷少尉に続け」

米沢精機女子工員ら頬を紅潮

山形航空細谷さんは僕の先輩だ
鶴岡航空忠霊に恥ぢる点なきや
帝マゴ我らの力まだ足りぬ
興社眼がしらに輝く涙 塩野氏より十万円献金 艦上爆撃機「十の命けふも帰らず 陸海一体の美しい光景」の見出しで、細谷少尉に触発された人の思いや戦意発揚の呼びかけが掲載されています。特攻攻撃作戦は、その後、沖繩戦で大規模に展開されます。昭和二十年四月六日から六月二十二日までの菊水作戦と呼ばれる海軍の特攻攻撃と、陸軍の特攻攻撃で、約三〇〇〇人が戦死したと言われています。沖繩は日本最大の地上戦のあった地で、日本軍は多くの航空兵力をこの地に注ぎましたが、特攻攻撃が敵艦船に対し致命的な打撃を与えるには至りませんでした。四月七日に特攻隊員として沖繩で戦死した西川町出身の工藤双二少尉の場合は、軍「布告」によれば、最後の一分間に「攻撃目標見ユ」「敵空母見ユ」「我艦船二突入中」と打電が続き、打電が途

絶えた後は戦果不明のまま「未帰還」となつたとあります（山形放送編『山形・戦没兵士の手紙』）。六月に入ると、多くの民間人を戦闘に巻き込んだ沖繩戦の敗色が濃厚となり、十五日には、陸相や首相の「本土決戦」の覚悟が新聞に載りますが、沖繩の特攻攻撃は続きます。そんな中、六月二十日付新聞に、特攻隊である振武隊国華隊長渋谷中尉（山形県出身）以下の隊員たちが出撃直前に綴った少国民への手紙が掲載されます。「山形出身渋谷中尉から学童へ日本の子らへ 特攻隊員が散れるのは君達が続くを信じるからだ」の見出しは、その文言からも、子どもたちの戦意発揚をうながすねらいが明らかです。そして、この記事に続けて、「細谷大尉偲ぶ 特攻隊感謝の日」の見出しで、次の予告記事が掲載されています。

八紘隊勇士としてレイテ湾上に散華した本市出身の神鷲故細谷幸吉陸軍大尉を偲ぶ「特別攻撃隊感謝の日」は、市青少年団主催の下に二十日午後一時より山形市第一国民学校講堂で開催される、当日は遺族を始め市内の各単位団高等科千二百名が参列し、細谷大尉の書簡の紹介、自作和歌の朗誦、並に神鷲顕彰に関する綴り方発表、講演其他の諸行事「特別攻撃隊ノ後二続カシ」の力強い決意表明がなされる。本県初の特攻隊戦死者である細谷少尉は二階級特進して「大尉」となり、細谷大尉を偲んで「特別攻撃隊感謝の日」がつくられ、子どもたちを鼓舞する行事が組み立てられています。特攻攻撃は人の命の代償として戦果を求めるものです。特攻という「禁じ手」の究極戦法に追い込まれた日本軍は、その死を美化し、無謀な戦争遂行のための戦意発揚の手段に利用しました。七〇年前の新聞報道は、軍の意向を忠実に伝えることを求められ、国民はその報道下で考え生きることを強いられました。当時の新聞から何を読み取るかは、後世の私たちの課題です。（山内 励）

江戸後期の情報ネットワーク

「東講」成立と

『東講商人鑑』出版

「東講」(あずまこう)とは、江戸時代後期の東日本を中心とした旅

宿・問屋・商店等の組合であり、

『東講商人鑑』(あずまこうあきんどかが

みは、その加入者リストであり、
講員が旅で利用する道中記です。

『東講商人鑑』の「序」には「安政二乙卯季秋 甲良山誌」と記され、甲良山(甲教舎良山)という人物が編者とされます。続く「東講例言」には「発起人 江戸湯島天神表門通り 大城屋良助」の名前で、講の趣旨が述べられています。

『東講商人鑑』の「最上高湯温泉之図」。長井市「文教の杜ながい」所蔵。

「口上」。『蔵王温泉史の研究(三)』所収。



すなわち、東講の宿には目印札を

掛け、旅人には番付の鑑札を渡し、

鑑札を見せて帳面と引き合わせれば、一人旅でも心安く止宿でき、

大切な品を預けても間違いなく、

同宿しても心配がないとしていま

す。この甲良山と大城屋良助は同

一人物とも考えられています。

一方、講員であった山形市の佐

藤利兵衛家には、『東講商人鑑』の

ほか、「諸国休泊 江戸大東講定宿

帳 目印看板」の帳簿と、裏面に

「羽州山形 佐藤利兵衛 金二両

二分皆納」と彫られた鑑札が残っ

ています。

歴史資料としての『東講商人鑑』

は、これまで、記載された旅宿・

問屋・商店等から城下町・在郷町の

発達や商人の動向を考察するのに

活用されてきました。また、陸奥・

出羽・越後・下野・上野や五街道

の周辺地域など東日本の大半と近

畿・四国までに広がるネットワー

クは、時代を映す動きとして注目

されてきました。しかし、「東講」

のネットワークがどのようにして

成立したのか、講員の加入や『東

講商人鑑』に掲載された地域・名

所の選出経緯など、「東講」や『東

講商人鑑』そのものについては、

口上

前文御用捨下さるべく候、然るは、先年私方へ止宿仕り候江戸書林大城屋良助殿、このたび商人かがみ御出版成られ候て、御持参成られ候処、尤も、先年名々様方御承知の上、御願ひにて御名前御印形成し下され候て、手付け等一分の定めにて、内二匁づつ御出し下し置かれ、このたび本御受取り成られ候、尤も、残り銀十三匁づつ御渡し成し下さるべく候、委細の義は御当人より御聞き取り成し下さるべく候

一 商人かがみ

上下二冊の品一冊にいたし候間、右の通り御承知下さるべく候、外に、道中記二冊 この代二朱

印鑑一枚 この代二朱と二百文

右の品の儀は、御用向きにて道中筋へ出され候みぎり、はたこやへ便りに相成り候間、御入用に御座候はば、金一分と二百文にて御渡し成らるべく候、御承知の上御もとめ成らるべく候 以上

わかまつや 長右衛門

九月十六日

源七様 喜兵衛様 善七様 八右衛門様 長助様 弥平治様 三右衛門様 孫左衛門様 代

吉様 仁右衛門様 善六様 藤左衛門様 弥兵衛様 伊右衛門様

右、御名の通り順番に御廻し成し下さるべく候 以上

〔書き下し文〕



若松屋長右衛門板「羽州村山郡最上高湯温泉之図」。『蔵王温泉史の研究(三)』所収。



緑屋源七板「羽州村山郡最上高湯村温泉之図」。蔵王温泉「緑屋」所蔵。

わからないことがたくさんあります。近年では、各地に残る『東講商人鑑』の比較・研究から、二〇数回に及ぶ改刻がなされたことや刊行まで一〇数年の年月を要したことなどが分かっています(新潟市亀井功氏の研究等)。

県内で「東講」の動きを示す史料には、村山郡の「最上高湯温泉」(現、山形市蔵王温泉)の事例があります(斎藤久雄著『蔵王温泉史の研究(三)』名主長右衛門)。最上高湯温泉では、宿屋一七軒のうち一四軒と商店一軒の計一五軒

が東講に加入しています。口上の形式で書かれた前ページの史料は、先年止宿した江戸の書店大城屋良助が商人鑑を出版して持参したので、本を受取り残金を渡すように伝えた「わかまつや長右衛門」から他の一四軒宛ての書簡です。天保前半に名主を勤めた長右衛門が、東講のまとめ役をしていたと思われる。

一方、『東講商人鑑』の最上高湯温泉のページには、湯効能書き入りの絵図が使われていますが、この図版とは別の最上高湯温泉絵

図が二点見つかっています。一つは、天保十五(一八四四)年の「高湯若松屋長右衛門板」の「羽州村山郡最上高湯温泉之図」で、もう一つは、弘化二(一八四五)年の「高湯村緑屋源七板 同宿屋中」の「羽州村山郡最上高湯村温泉之図」です。いずれも「東都甲教舎良山画」とあり、『東講商人鑑』作成の過程でつくられたものです。

甲教舎良山の絵図は、天保十五年に山形十日町の書店北條仲兵衛のもとで「大増補道中独案内図」が出版され、明治期にも改訂版が

出されています。

「東講」結成にあたり、講元の大城屋良助は、各地の城下町・在郷町や名所を回り、地域のまとめ役を通して講への加入者拡大をはかり、手付金を預かり、『東講商人鑑』出版後に購入をうながし、ネットワークづくりを進めました。さらに、それらの過程で交流した人の要請に応じて、甲教舎良山の絵図を刊行しながら、『東講商人鑑』出版に至ったと思われます。

東日本を舞台とする「東講」『東講商人鑑』を見ると、その内容・交流ともに山形県とのつながりに大きなものを感じます。「東講」成立と『東講商人鑑』出版に関わるさらなる情報発掘が待たれるところです。(山内 励)

『山形県 県史だより』第四号追記
統計資料 「明治期の地域医療従事者」表3(ページ)の西田川郡「神浦村」は、原典のまま表記しましたが、「袖浦村」のことです。

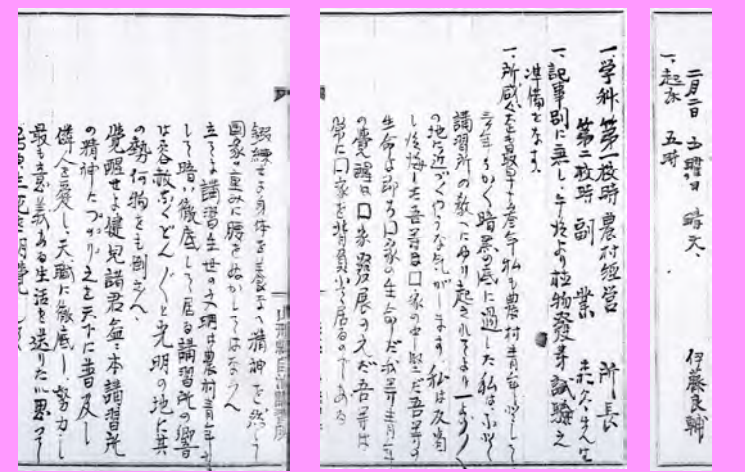
寄贈資料紹介
「山形県立自治講習所
関係資料」

前号で紹介した「山形六日町教会関係資料」(複写)に続き、昨年六月に、千葉県在住の鈴木千代志氏より「山形県立自治講習所関係資料」(複写)一箱分を寄贈いただきました。「山形県立自治講習所関係資料」は、大正四(一九一五年)に大正天皇即位大典記念事業として創立された山形県立自治講習所の講習生名簿、各期講習生口誌、農場・整理・家畜・自治寮・炊事等各種口誌、印鑑簿、履歴書綴、上山農学校資料等の三三冊から成ります。原資料は、自治講習所の後身につながる山形県立上山明新館高等学校が受け継ぎ保管しています。

山形県立自治講習所は、当初、市町村自治に従事する吏員や地方のため尽力する有志の養成を目的として設置されました。自治講習所計画の背景にはデンマークの国民高等学校教育があったとされま

すが、その所長には、愛知県立安城農林学校教諭加藤完治が選ばれました。加藤は、古神道(かんながらのみち)を唱える寛克彦に師事し、愛国主義を奉じ、実践躬行(きゅうこう)による農村青年教育を主張した教育者とされます。加藤は大正十四年十二月まで任にあり、同僚の西垣喜代次に任を引き継ぎました。自治講習所の定員は四〇名、市町村吏員・青年団指導者等二十五歳以上を対象とし、修業年限一カ年、一月から四月まで自治寮生活・学科授業、十月まで農場実習・精神鍛錬、その後に見学旅行とされましたが、年齢は四年目より十六歳以上となりました。師弟の共同生活、開拓労働による心身鍛錬という教育は大きな反響があり注目を浴びましたが、早朝の「襖(みそぎ)」や「大和体操(やまとはたらき)」など特異な行事もありました。施設は、山形市薬師町に教室・宿舍・事務室・道場をつくり、地蔵町に実習農場を借り、大正九年には大高根村(現、村山市)の葉山中腹に農場

を設置しました。加藤は、大正十年に入寮生の言葉から農村子弟と耕地問題に目を向け、同十一年から十三年の渡欧で拓殖教育と移植民に傾き、朝鮮・満州などへの移民政策につながったとされます。資料の内、講習生らが書き綴った口誌には、日々の行事・行動や感想が記されています。とりわけ、大正末期の口誌には、所長である加藤の教えや一挙一動が頻繁に取り上げられ、講習生らが加藤に心酔していく様子がうかがえます。昭和八年、自治講習所は廃止され、上山町の山形県国民高等学校に引き継がれます。「山形県立自治講習所関係資料」は、農村や市町村行政の中核となる人材輩出をめざした山形県自治講習所で、次代を担う青年らが何を学び考えたのかを教えてください。なお、これらの資料は、前東北公益文科大学教授三原容子氏の庄内地域史研究所のサイト「山形県と満州移民・山形県自治講習所関係等」で翻刻を見ることが出来ます。(山内 励)



『大正十三年度 口誌 第九期生』2月2日伊藤良輔「所感」の熱い思い。

山形県 県史だより 第五号
平成二十七年六月三十日発行
編集・発行
山形県総務部学事文書課分室
県史資料室
千九一 八五〇一
寒河江市大字西根字石川西三五五
村山総合支庁西庁舎
電話 〇二三七 八三 一二一五
FAX 〇二三七 八三 一二一六